

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第980号 平成27年8月13日

未来志向と謝罪

終戦記念日を前に予定されている安倍総理大臣の「戦後70年談話」については、1年以上も前から国内外で大きな関心を呼び、議論されて来ました。その一番の理由は、今回の談話は、戦後70年という大きな節目に当たるという事だけではなく、中国や韓国とかつてなく厳しい関係にある中で、果たして未来に向かって建設的な一歩を踏み出せるかどうかを占う、いわばリトマス試験紙のような意味合いがあるからです。

安倍総理大臣は、「戦後70年談話」について、戦後50年に出された村山談話を全体として引き継ぐとしつつも、「植民地支配」や「おわび」という文言については、同じ事を入れるのでは談話を出す必要がないと述べ、未来志向による談話を志向しているようです。

また、今回の談話が、戦後50年談話や60年談話の時と違うのは、安倍総理大臣が「英知を結集する」として私的諮問機関「70年談話委員会」を設置し、その中で、どのような内容の談話を出すべきかについて議論を重ねて来た事です。

安倍総理大臣は、この「70年談話委員会」の委員に対して「未来への土台は、過去と断絶したものではありえない。先の大戦への反省、戦後70年の平和国家としての歩みの上に、これからの80年、90年、100年がある（2月26日付読売新聞から）」と述べたと伝えられていますが、そうであれば、その真意が十分伝わるものであって欲しいと思います。

我が国はこれまでも、過去の戦争について謝罪を繰り返して来ました。しかし、中国や韓国からは何かある度に過去の歴史問題を持ち出して攻撃されるという状況が繰り返されて来ました。こうした中、安倍総理大臣は新たな談話を出す事で、そろそろそうした状況から脱却し、未来志向による新しい関係を作りたいと考えているのだと思います。

日本が如何に謝罪しても、中国や韓国にその気がなければ残念ながら和解は難しいというのが現状ですが、だからといって、真の和解に向けた努力を続けなくて良いはずはありません。

何と云っても、一衣帯水の隣国という関係にありながら、歴史問題が横たわって何時までも未来に向かって歩みだせないというのは、日本はもとより中国や韓国に

とっても不幸な事ではないでしょうか。

メルケル首相は「過去と向き合えば和解できる(3月10日付日本経済新聞から)」と述べたといいます。確かにそれは、貴重なご提言ではありますが、今なお領土を巡ってつばぜり合いを演じている日本や中国・韓国との関係と、冷戦下に、ソビエトという共通の敵を抱えていたドイツとフランスとでは、置かれている状況はかなり違うというべきで、和解への道は決して平坦ではありません。

北大大学院の吉田徹准教授は、談話について、歴史を他国と共有することは極めて至難であり「本来ならば、歴史認識が争点となるのは避けなければならない(3月6日付北海道新聞から)」と述べています。しかし、現実には、談話はそれ自体が既に大きな政治的テーマになっており、日本は、談話を出す事で国際的な孤立を招く事のないよう十分な配慮が必要です。

特に、歴史認識として大きな問題となっているのは、従軍慰安婦の問題もさりながら、日本軍の中国大陸での行動が「侵略」だったのか「進出」だったのかという認識の相違です。中国は当然、あれは「侵略」であるとしていますが、日本国内では「侵略」だったという人がいる一方で、それを認めず「進出」だったと主張する人が存在します。

4月22日付の読売新聞社説では、『『侵略』の定義について、広辞苑は、『他国に侵入してその領土や財物を奪い取る事』とされている事からすれば、少なくとも1931年の満州事変以降の旧日本軍の行動が侵略だった事は否定できない』と指摘しており、私も、その点については同感です。

かつて自民党議員での文部大臣や農水大臣を務めた島村宜伸氏も、日本軍の行動が侵略だったのかどうかについて「何もしていない平和な町に入り込んで行ったのだから『侵略』という面はある。細かい部分を捉えれば、決して正当化できない後ろめたい問題も多くある。それが戦争だ(4月9日付北海道新聞)」と述べると共に、今度の安倍談話に関して、戦後40年の節目にドイツのワイゼッカー大統領が発表した議会演説「荒れ野の40年」のように、大きなインパクトがあり、それ以降に談話を発表する必要がなくなるようなものにすべきとの考えを示しています。

中には「侵略したと認めれば自分の国に誇りを持つなくなる」という人がいますが、私は、全くそうは思っていません。日本は、かつてどういう事をして来たか、負の遺産もしっかりと見せるべきです。その上で日本は、反省すべきを反省し、平和国家として世界に貢献して来た事を、子ども達には胸を張って伝えるべきでしょう。戦後70年、他国とは一度として戦争をして来なかった日本の歴史は、十分誇り得るものではないでしょうか。

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」という言葉があります。安倍総理は、歴史から何を学び、それを未来に如何に繋ぐか、未来志向というなら、視線は内側

にではなく、広く世界に開かれていなくてはなりません。

(塾頭 吉田洋一)